
陽だまりのように、暖かな

さち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽だまりのように、暖かな

【Nコード】

N4586I

【作者名】

さち

【あらすじ】

『アルバイト募集！ 月給100万円』
こんなチラシに見事に釣られた俺。でもつまい話には裏があるわけで……俺、何させられちゃうんでしょー!？

デフォルトでテンション高め的主人公・鷺澤燠ささきわいくくんが送る、アルバイトコメディです。

4 / 2 1

更新再開。諸事情により全話差し替え。

001 はじまりは百万円(前書き)

こんにちはこんばんははじめまして。はじめましてじゃない方も
こんにちは。

さち (さちおめが)と申します。

多忙につき半年間全く更新ができず、さあいざ再開と思って読み
直していたら修正したい箇所だらけ&プロット消失という酷い有様
となっております……真に勝手ながら、全話差し替えさせていた
だきます。展開や設定等にも多少のほの変更点があります故、ご理解い
ただける方のみお先に進みください。

大変申し訳ございません。

001 はじまりは百万円

突然こんな話始めちゃってすみませんけど、世の中って結局のところお金が全てだと思いませんか？

平穏な日常 それはとても心地良い響き。

素晴らしき日々。

何物にも代えがたい守るべきもの。

そこにちよっとしたスパイスでもあれば最高です。かけすぎは困りますけどね。

でも、それらの日常を支えているものって何だろうと考えてみますと、お金なんですよ。

お金がなければご飯が食べられません。

服だって買えません。

友達とカラオケに行ってノリノリでタンバリンを叩くこともできません。

デートなんて行った日には公園でお散歩（お弁当持参）という悲惨な事態になってしまいます。

というかまずデートする相手が欲しいです。

……最後のはただの願望でしたが、とにかく、日常を滞りなく堪能するためにはお金は不可欠なのです。

不可欠な上に、いくらあっても困りません。

というわけで、俺は世の中ってお金が全てだと思っわけですよ。

汚らしいセリフだとは重々承知してますけど。

いやね、そりゃあ愛だの勇気だの友情だの、お金で買えないようなものもいっぱいありますよ？

でも結局のところ、それもお金という基盤によって支えられているわけで。

人という生物はお腹が膨れなければ頬が膨らみませんからね、ええ。世知辛いものです。

しかしお金を稼ぐということは大変なことです。

学生の身分である俺が月に稼げる金額は、恐らくせいぜい一〇二二万円程度。

大学の講義もある関係上、これ以上はどう頑張っても無理でしょう。首都圏など時給の高い地域ならば可能なのかもかもしれませんが、残念ながら俺の地元は田舎なのです。最低賃金万歳。

もしかしたらもつと効率良くお金を稼ぐ方法もあるのかもしれませんが、せんが、浅学な俺にそれは思いつきません。

毎日働いて俺を養ってくれていた両親という存在の偉大さを今更のようにひしひしと実感させられてしまいます……。

だから　こんなチラシがあつたら思わず高揚しちゃっても仕方がないと思うんですよね。

たとえどんなに怪しくても、思わず電話かけちゃうと思うんですよね。

かけずにはいられないと思うんですよね！

『アルバイト募集！！』

月給………百万円

条件………明るく健康な方』

こんなチラシがあったら。

「とはいっても、やっぱり怪しいですよねえ……」

時はあと一時間程で日付が変わるといったところ。

つまり午後十一時頃。

良い子はねんねのお時間です。

イベント会場の受付という日雇いアルバイトの帰り道の途中でそんなチラシを拾ってしまった、俺こと鷺澤燠さぎさわいくは、無駄に電灯が多くチラシを読むのにも問題がないくらいに明るい公園でひとり、ベンチにふんぞり返っています。脚なんかも組んじやったりして非常にお行儀は良くありませんが、まあ時間が時間なので誰もいませんし、別に大丈夫でしょう。今日の俺はアルバイトの内容が内容だったのでスーツ姿ですから、きつとこんな時間まで残業お疲れ様公園でちよつと一服しつつゆっくりしていつてねサラリーマンさん！というような目で見られないはずです。どんな目なのかはご想像にお任せしたいと思います。

……というか、人の気配がなさすぎて人の目も何もありませんけどね。

この公園 七見河第三公園は俺の自宅のすぐ近くにある公園なのでですけど、住宅地のすぐ脇に設置されている割には広いですし、中央に立つ樹齢何百年という杉の木が象徴的な緑の多い公園なので、俺は昔から結構気に入っている場所だったりします。当然俺以外の近所の方々からも人気で、昼間は買い物帰りの主婦様たちが井戸端

会議をするために、夕方には学校帰りのちびっ子たちが広々とした敷地で遊ぶために集まりなかなかの賑わいを見せる、地域の憩いの場となっております。反面、そのピークを過ぎればこの通り寂しいものですが……これはこれで静かで良い雰囲気のある素敵な場所だと思います。

ここに住んでも良いくらいですね。

……すみません言い過ぎました。そんなサバイバル無理です。

さて、簡単な状況説明は終わりました。

それよりもこのチラシのことです。これは大変なことです。どれくらい大変かって、とにかく大変だと言いたくなる大変さなのです。

月給百万円ですよ、百万円。

ひやくまんえん、つまり一万円が百枚ということですよ。

諭吉が百人ということですよ。

よくあるテレビ番組とかの賞金的な金額ですよ。

一般サラリーマンの三ヶ月分のお給料ですよ。いえ、もしかすると四ヶ月分かもしれません。

今まで好条件のアルバイトを見つけることができず日雇いのアルバイトばかりを渡り歩いてきた俺にとって、このありえない条件は眉唾ものです。棚からぼた餅といった感じです。幸運の神様の存在を全力で肯定し、そのありがたみを世界中へ大々的にアピールしちゃいたくなること間違いなしですよ。新しい宗教なんかを創設しても良いですよ。

何せ俺だいぶ前に両親とか亡くしちゃってまして、妹と二人暮らしなんですよハイ。

一応遺産なんかもそれなりにはあったんですけど、両親はごくごく一般的な会社員だったので、家のローンを支払ったり学費を支払

ったりしていたら残高が心許なくなつてきちゃいまして、更にこれから四年間学費を払い続けなければならぬことを考えるととてもじゃありませんけど足りたものじゃありません。

赤字もいいところですよ。

そんなワケ有り学生の味方、奨学金制度は当然利用するつもりですがそれにしたつて厳しいことに変わりはありません。

それに今年度は可愛い可愛い妹の受験だつて控えています。できれば彼女が行きたいと希望する大学に行かせてやりたいですから、予備校に通いたいと言えば通わせてあげるつもりですし、県外の大学に行きたいと言つのなら一人暮らしに必要なものだつて買ってあげるつもりですよ。

だからそのためにも何とかしなきゃなあと思つていたところなんですよね。

そんな状況にある俺がこのようなチラシを拾つたということは、まさに天啓！

神様によるありがたいお恵みに違いありません！

おお、アーメンジーザスハッピーニューイヤー！

ありがとうございます神様土下座して御礼申し上げます！

……と言いたいところですが。

やっぱり、怪しすぎますよねえ……。

何故かつて、このチラシ、給料と募集の条件は書いてありますけど、会社名の記述もなければ肝心の仕事内容についても何の記述もないんですよ？

『詳細は下記電話番号へお問い合わせください』との記述の通り電話番号だけはきちんと記されていますけど、電話をかけたら変な会社や有料サービスとかに繋がつて多額のお金を要求されたりするんじゃないか……？ あわわわ。

しかもこのチラシ、なんと手書き。

このデジタル化が進んだ二一世紀に手書きって……手を抜いているんだか手をかけているんだかよくわかりません。怪しさ助長しまくりです。丸っこい字でやたら可愛い感じですが、それが逆に怪しさを引き立てているような気がします。とにかくひたすら胡散臭いのです。

百万円という破格の給与は確かに魅力的ですけど、その給与以外に魅力はゼロ。

はたしてこんな怪しげな求人に応募する人などいるのでしょうか？ 常識的に考えてこの求人がまともなものであるはずがありませんし、リスクばかりが高いですね。

もしもいるとしたら相当の物好きか、変人か、チャレンジャー精神に富んだ人か、あるいは

「俺くらいでしょうね！」

24時間受付OK!となっていたので、つい先程に。てへ。

……いや、だってだって怪しいのはわかりきってますけど、本当に百万円をもらえるバイトだという可能性もゼロとは言いきれないじゃないですか。少しでも可能性があるのなら俺は縋ります。

だって欲しいですもん、百万円。

もし本当に毎月百万円ももらえるのだとしたら、鷺澤家の生活は安定どころか贅沢をする余裕すら出てくるでしょう。そんな可能性が目の前に転がっていて、手を伸ばさずにいられるわけがありません。宝くじを買うよりは可能性高いんじゃないかと思えますしね、ええ。

求人人数は一人だけでしたし、もたもたしてたら誰か他の人が先に申し込んでしまったよ、きっと。

というわけで後悔はしてません。

電話してしまったことにより俺の携帯番号が相手方にしっかりと伝わっていたとしても後悔はしてません。

それがたとえ悪用されることになったとしても後悔はしてません。その結果電話会社から身に覚えの無い多額の請求が届いたりしたとしても後悔　あ、やっぱりします。ごめんなさいやっぱり後悔します。超リグレットです。

とまあ、多少ネガティブな考えに至ってしまうのにも一応理由があります。

実は先程電話で話した感じ、やっぱりちょっと変だったのです。

変というか……あれはむしろ謎というべきでしょうか。
会話を再現するとこんな感じ。

「あ、もしもし。アルバイト募集のチラシを見て応募させていた
いただいたのですが」

「え、本当かい？　いや良かった良かった、一向に応募がなく
て困ってたんだよね。うんうん、ありがとうありがとう。じゃあ早
速面接したいんだけどいいかな？」

「は、はい？　あの、えっとその前に仕事内容の詳細などを確認
させていただきました」

「ああ、そんなの後でいいからいいから。じゃあ今からそこ行く
から、ベンチにでも座って待っててよ。じゃあねー」

ここで電話は切れました。

それはもう一切の言葉を挟む暇も無く。

……変、というか普通ならありえませんか……。。

突っ込みどころが満載過ぎです。

俺、名乗る暇すらなかったんですけど。

もちろん今俺がどこにいるかということだつて言う暇はありませんでしたから、『今からそこ行くから』なんて言われても『そこ』というのがこの市民公園であるのか、はたまた別の場所なのかどうやら。というか、まさか逆探知なんてできるはずがないでしょうし、電話をかけただけで居場所を特定されるだなんてことは無いでしょうから、ますます『そこ』というのがどこのことなのかわかりません。

とりあえず電話をかけた場所がこの公園でしたし、丁度良くベンチもあつたのでこうして言われた通りに腰掛けて待っていますけど。

……けど、誰かが現れる気配は今のところゼロです。

電話をかけてからもう既に三十分が経過しようとしています、その間人っ子一人として見かけません。さすがサイレントヒーリングスポット七見河第三公園。

やはり場所がわからずに迷っているのでしょうか。

それともただのイタズラだったのでしょうか……。

もし前者だつたら大変です。

かわいい女の子がこんな遅い時間にうろろしていたら街の不良や変なおじさんに絡まれてしまいかもしれません。この辺りの治安は悪くないはずですけど、それでも深夜の女の子の一人歩きが危険

であることに変わりはないはずですよ。

あ、何でかわいい女の子と表現したかというのと、電話で話した相手があともかわいらしい声をした女の子だったからです。

……喋り方は変でしたけど。

応対も変でしたけど。

それ以前に、本人が来るとも限りませんが。

でも本人だとしたら間違いなく美少女ですよ。声でわかります。

何にせよ、あと五分待つても来ないようでしたらもう一度電話をかけてみましょう。

俺とて健全かつ真面目で優秀な学生なわけで、いつまでも待つていられるほど暇ではないのです。明日は一限目から講義がありますし、早めに就寝させていただきたいところなのです。

睡眠不足はお肌の大敵。

そして真面目な受講態度の敵（居眠り的な意味で）。

それに帰りが遅くなれば俺の愛する愛する妹も心配するでしょうし。そりゃあもう枕を濡らす勢いで心配しているはずですよ。

……心配してくれるよね？ ね？

まあ、深くは考えないようにすることにしまして。

あと五分待つにしても少々肌寒くなってきました。まだ四月の半ばですからね、昼間はそれなりにぽかぽかとした陽気を感じられるようにはなってきたもののこの時間になるとまだまだ冷えます。コートを着てこなかったことを後悔せざるを得ません。

ホットコーヒーでも飲んで体を温めることにしましょう。

こういつ無駄遣いはあまり感心できないのですが、百万円のための必要経費ということにして妥協します。風邪をひくよりはマシでしょうしね。

そうと決まれば早速行動。
ベンチから冷えた腰を持ち上げ、公園の入口に設置されている自動販売機へと向かいます。

コーヒーはブラック派なのですが、飲みたいときに限って売り切れていたりしますからね、ちょっと心配です。もし無かったらコンポタ、あるいはココアにでもしましょう。甘ったるいコーヒーだけは絶対に飲みたくありません。大人な男である俺には砂糖もミルクも必要ないのです。人生もコーヒーも、苦いくらいが面白いのですよ……ふふふ。なんちゃって。

「……おや？」

そんなことを考えながら自動販売機のもとへとたどり着いた俺でしたが、そこには先客がいました。

人気は全く感じられなかったはずなのですが……いつの間に？

その先客は俺の登場に気付くと、にこりと愛想よい笑みを浮かべて、こう言うのでした。

「長い時間待たせて悪かったね。寒かっただろう？ お詫びにと思って暖かい飲み物を買っていたのだけれど、どうだい？」

そうして差し出されたのは甘ったるそうな缶コーヒー。

……よくわかりませんが、とりあえず。

このお方とは趣味が合わないということとは確かみたいです。

人工的な明るさで満たされた夜の公園の小さなベンチに隣り合わせで座る影が二つ。

そのひとつはもちろんこの俺、鷲澤燠のものです。

甘ったるいコーヒーに吐き気を催しながらも、せつかくの心遣いを無駄にするわけにもいかないということで頑張つてちよびちよび口をつけている次第であります。おかげさまで一応体は暖まりましたけど、気持ち悪いつたらありやしません。帰つたら絶対口直しに濃い目のコーヒーを飲んでやると心に決めました。

ところでもうひとつの影　つまり俺の隣に座っているのが誰なのかといえば、甘ったるいコーヒーを美味しそうにする、自動販売機の先客様です。

夜風にゆらゆらと揺れる赤みがかった滑らかで綺麗なブロンドヘア、雪のように白く透明感のある肌、空の青より蒼いであろう瞳、そしてあたかも緻密な計算の上で作られた人形のように整ったその顔の造形　先客様はそんな人間離れした風貌の、小柄な美少女でした。

動かす喋らなければ本物のお人形さんのようです。

歳は大体中学生……いや、小学生高学年くらいででしょうか？

その華奢な身の丈は俺の胸まで届くか届かないかといったぐらいで、ひらひらとしたフリルがあしらわれたゴシック調の黒いドレスを身につけているせいもあってか、持ち上げたらすぐく軽そうな感じがします。高い高いとかしてあげたいです。

……。
で、誰なのでしょうこの娘は。

淡々と説明してみましたけど、実は結構混乱していたりします。どうして俺は出会ったばかりで見ず知らずの女の子に甘ったるい缶コーヒーを進呈されて一緒に飲んでいたのでしょねえ……？ 気にしたら負けとかいうゲームなのでしょか、これ。勝てませんで。

親御さんが一緒ではないようですから、大人の一員としてここは帰宅を促すべきなのでしょうか。

夜遅くの幼い少女の一人歩きは大変危険です。しかもこの子のような美少女なら尚更危険です。

というか、むしろ俺の身だって危険です。こんな夜遅くに少女とベンチに座つてのんびり缶コーヒー飲んでる姿なんてお巡りさんに見つかったら即職務質問でしょう。事情を話せば注意くらいで済むかもしれませんが、余計な疑いは受けないに限ります。冤罪ダメ、絶対。

でもワケあり家出娘さんという可能性だつて無きにしもあらずです。そんな少女相手に「早く帰りなさい（柔らかい笑みをたたえながら）」なんて言ったらどんな地雷を踏んでしまっやら……。

これから面接も控えている（かもしれない）わけですし、トラブルに巻き込まれるのは勘弁していただきたいところです。事なかれ主義バンザイ。

まあ、でもわからないのならば聞けば良いだけの話です。

人は生物の中で唯一言葉を用いることによつて情報を伝達し合うことのできる高尚な生物なのですから、その能力を存分に活用すべきでしょう。出し惜しみをする必要などないのです。全力全開で発揮してしまえば良いのです。

幸いにもこの少女、先程自動販売機の前で少し話した感じでは日本人離れした外見であるにもかかわらず日本語は達者なようでしたし、会話をするのに問題も無いはず。つまり進路オールグリーン、発射オーライ五秒前！

俺のコミュニケーション能力が試されます。

「……あのーすみません、コーヒー貰っておいてアレなのですが、あなた様はいったいどのどちら様なのでしょうか？」

とりあえず無難な言葉から入ります。

すると少女は缶コーヒーからその小さな口を離して、会話の基本である愛想の良い笑みを浮かべた俺の顔へと蒼い瞳を向けてきます。

「どちら様、か。ふふふ、そうだね、名乗りもしないでいきなりコーヒーどうぞだなんて言われても困っちゃうよね。うんうん、実に当然の疑問だよね、ごめんごめん」

そう言いながら微笑む少女の表情にはどこか妖しげな雰囲気醸しだされており、外見とのギャップに少々驚かされる俺。

何と云うのでしょうか、妙に大人びているというか……落ち着いているというか。

子供と接しているというよりは大人のお姉さんと接しているような感覚がするというか。

不思議な子です。

「僕の名前は禍波命。まがなみめい禍々しいの『禍』に津波の『波』で『禍波』
あとは生命の『命』で禍波命だよ」

「禍波さん……ですか。珍しいお名前ですねえ」

名前の珍しさ以前に和名だったことに驚きですが……。
ハーフさんなのでしょうかね。
というか僕っ娘さんだったんですね。

「キミのお名前も聞かせてもらえるかな？ 一応僕も名乗ったわけだしね、訊いても良いだろう？」

「あ、ハイ、そうですね、名乗っていただけに俺だけ名乗らないというのも変な話ですね。えーと、鷺澤燠と申しますです、ハイ！ 是非是非『いっくん』と親しげな愛称呼んじゃってください構いません！ ハイ！」

「ふうん。なるほど。よろしくね、イクつくん」

「クが増えただけで卑猥な愛称に!？」

「だが僕はあえて絶頂くんと呼ばせてもらうことにするよ」

「鷺澤エクスタシー!？」

生まれてこの方そんな愛称で呼ばれたことはありません。

というか、もはや愛称ではなく蔑称ですよ。イジメですよ、

グスン。

……しかし、可愛らしく幼い外見の割に下ネタとか全然イケちゃう子なんですね、禍波さん……。
スペック高い。

「……ええと話を戻しまして。では禍波さん、こんな所でいったい何を？ どうして俺にコーヒーなんて奢ってくれたのです？」

「ダーツを投げたら偶然この公園に当たってね」

「ダーツの旅!？」

「空飛ぶパンツがここに墜落」

「してませんよ!？」

「キヤーーイヤー燠くんつたらこんな人気の無い公園に連れ込んで僕に何をするつもりなんだいこのケダモノ」

「俺が無理矢理連れてきたみたい!？」

「まあ全部嘘だよ」

「じゃなきゃ困ります……」

読めない……!

会話の流れが全く読めない……!

俺としたことが、突っ込むのがやつとです……！

しかし禍波さんはそんな俺の戸惑いをよそにまだ残っていた缶コーヒーの中身を一気に飲み干し、ベンチの横にあるゴミ箱へと向かって放り投げます。投げられた缶は吸い込まれるかのように綺麗な放物線を描いてゴミ箱に吸い込まれ、カランカランと甲高い音を立てて収まりました。

その一連の流れを見届けてから、禍波さんは再び口を開きます。

「本当はね、燠くん、キミに会いに来たんだよ」

「俺に……ですか？ え、あの、あれ、でも俺たちって初対面ですよ？ 前に会ったことありましたっけ？」

「あはは、それ一昔前のナンパ文句みたいだね。でも……違うよ。僕たちは真正銘初対面。後にも先にも、僕らが初めて出会った瞬間は今この時以外にないさ」

「……？ それではどうして俺に？ 何の理由も無く……というわけではないはずですし」

「前世の因縁を果たさせてもらおうかなと思ってね」

「それは予想だにしなかった理由です!？」

「僕はキミに『ぐえへへへ、お前の体、付き合い始めた頃は百点満点中九九点つてとこだったんだけどよお……飽きちゃった。今はせいぜい四点くらいだな。つーわけで、お前もういらぬ。さつさと帰ってくんね?』と言われたあの日のことは死んでも忘れら

れなかったよ」

「前世の俺最低ー!?!」

「というわけで今回の人生でも弄ばれにやってきたわけだよ」

「あれ!?! 今の流れだと恨みを晴らす感じじゃありませんでした!?!」

「僕つてば鬼畜展開フェチだからさ」

「また難儀な趣味ですね……っっていうかどうせまた冗談か何かなんですよね? ふふっ、俺にはわかってますよ!」

「あはは、まあね。趣味以外は(ボソツ)」

「……………」

ボソツと何か聞こえたような気もしましたが、俺は何も聞きませんでした。

なーんにも聞こえませんでした。

ええ何も。

…………… 本当ですっつてば。

「ところで僕らの初デートでは何を食べようかという話の続きなのだけねど」

「どこから飛んできたんですかその話!?!」

「僕とて女の子だからね、やっぱりオシャレでロマンティックな食事を希望するよ。例えば……そうだね、本格的なイタリアンのお店でパスタなんか食べたいね」

「は、はあ、パスタですか……。でもパスタってオシャレでロマンティックですか？」

「乙女心をくすぐるほんのりと甘酸っぱいスパイスの効いたホワイトソースに高原を吹き抜けるそよ風のような爽やかさを加えた初恋風味仕立て　そんなパスタなら」

「シエフ泣かせの注文っ!？」

「えー、でも『このパスタは一見するとただのパスタにしか見えないかもしれないが、実はこのパスタが誕生するまでの間にはシエフの葛藤、苦悶、挫折、後悔などといった様々な感情が織り交じった、血と汗と涙と愛情の物語があったのだ　!』とかなんとかロマンティックな演出とかできそうじゃない？」

「わあすごいドラマティック!」

視聴率とれなさそうなのドキュメンタリーになりそうですね……。女の子ってよくわかりません。難しいお年頃です。

「……ってまた話がずれましたよ禍波さん。それで、俺に会いに来た理由って何なのですか？　そろそろ聞かせてくださいよう」

「おや、まだわからないのかい？ 燗くん、それはちょっと鈍すぎやしないかな」

「と言われましても……禍波さんのような可愛らしい女性から声をかけられる理由なんてまったく身に覚えがありませんよ。降参です。白旗です。リングに白タオルを投げ入れますよ」

「諦めないでござらんよ。うーん……じゃあ、こう言えばわかるかな？ キミは今日、こんな夜遅くにこの公園で何をしていましたかい？」

「俺がこの公園で何をしていたかって、それは」

百万円というあり得ない月給が記されていたアルバイト募集のチラシを見つけて、電話して……よくわからないままに電話は切れましたが、今から面接をしたいからそこで待っててと言われたのでベンチに座って待っていて、そうしていたら寒くなって缶コーヒを買おうとして禍波さんに会った

……え。

情報を整理してみたらアラびつくり、ひどく陳腐で簡単で単純な答えしか導き出すことができません。

禍波さんの子供のような外見という視覚的情報を抜きにすれば、その結論へと辿り着くのはより容易なこととなります。というかむしろそれ以外の結論に辿り着くことは不可能です。

アルバイトの応募の電話をした。

待っていた。
人が来た。
つまり

「まさか……まさか禍波さんが百万円アルバイトの雇い主様だったんですか!？」

「ご名答。 さあ、面接を始めようか、鷺澤燮くん？」

俺の新しい上司様は、どうやらロリ美少女のようです。

はいコンバン八鷺澤燠です。
絶頂くんではありません。

そんなわけですいにやってきました、楽しい楽しい面接の時間です。
ごぞいます。

え？

どうして面接が楽しい時間なんだって？（自問自答してみます）

そりやあなんかこう、面接って一対一の人間が真剣に向かい合う
じゃないですか。だから何て言うんでしょうね、心の奥底まで覗か
れているような気がして、ぞくぞくするといいますか、端的に言え
ば見られる快感といいますか、んぎもぢいいいい！みたいな？

……あ、ハイ、冗談デスヨ？ 鷺澤エクスタシーではありません
からね、ええ。俺の愛称はいっくんですからね、ええ。

いやはや、でも日雇い以外のバイトの面接なんて初めてですから
ね、やはり少々緊張しているようです。

人前に出るとかえって興奮するような性格なので、緊張等とは無
縁だと思っていたのですけど、そんなことはなかったようです。
いっくんも一般的な男の子ってことで、はい、おあとがよろしいよ
うで。

よろしくなくても、前置きはこのくらいにしましょう。俺のワン

マントークばかりじゃ楽しくありませんもんね。やっぱり登場人物に美少女は必須ですよ。マジで俺にロリ趣味はありませんけどね。

というわけで、そろそろ美少女こと禍波さんによる面接を始めていただきますしよう。

隣に腰掛ける禍波さんに可能な限り体を向けて、誠意と魅力に溢れるキリツとした表情を作り、彼女の言葉を待ちます。

キリツ。

「……さて、じゃあこれから面接をするわけだけど」

「ハイ！ 鷺澤燠、準備は万端でございます！ 好きな食べ物から得意な性癖まで何でも答えちゃいます！ よろしくお願いします！」

「じゃあ、採用ということでは」

「あつ、本当ですか！？ ありがとうございますありがとうございます！ これからよろしくお願いします！」

「うんうん、よろしくね、燠くん。じゃああとは仕事を頼むときに電話させてもらうことにするよ。あ、番号は着信履歴にあるから大丈夫だよ」

「そうですね！ はい、ありがとうございます！ それでは失礼しまし

と、俺はベンチから立ちかけて、

「　　つてええええ！？　採用！？　面接のめの字も始まってなかつたのに採用つて一体全体どういうことですか！？」

いい加減突っ込みました。

……いや、スルーできませんって。

不採用ではなくて採用なのですから不満があるわけではありませんが、だからといって面接らしい話を一切せずに採用などと言われなくても納得できるはずがありません。

『嬉しい』より『どうして』という気持ちのほうが大きいのです。

……はっ。

でももしかしたら禍波さんに俺を一目見た瞬間ビビビとくるイナズマ的なものがあつて、採用を決めたのかもかもしれません。

だとしたら何ら不思議な点はありません。

いえ、むしろ仕方のないことだとも言えましょう。

やっぱり俺の内からとめどなく溢れ出るこのカリスマ的な人を惹きつける力みたいなのは抑えようがないですからね、思わず採用と言ってしまった禍波さんの気持ちはよくわかりますよ、ええ。

いやはや俺もなかなか罪な男ですねえ！

あはははははは！

「　　つてな感じの理由ですかね？　採用の基準になつたのは！」

「燗くんってたまにウザいって言われないかい？」

「ごめんなさい……」

「ですよー」。

「では禍波さん、俺の魅力が原因ではないのでしたら何故俺は採用なのでしょう。面接どころか自己紹介したくらいじゃないですか」

「うん？ ああ、採用の理由ね。理由、理由……そうだね、強いと言うなら」

「強いて言うなら？」

「ノリで」

「ノリ!?!」

「もしくはフィーリングとか」

「フィーリング!?!」

「さっき言ったパスタとか」

「パスタ!?!」

「にゃんぱるにゃんぱるぷりりひー」

「にゃんぱるにゃんぱるぷりりひー!？」

「……何でもいいからとりあえず驚いてみるでしょ、燠くん」

バレてました。

「とは言われましても禍波さん、ノリやフィーリングで雇ったなんて言われたら驚くしかないじゃないですか。というか、まさか本当にそんな理由で雇ったなんてことはありませんよね？」

「にゃんぱるにゃんぱるぷりりひー」

「誤魔化すときにも使えるんですね、それ……」

「いやまあ誤魔化すつもりはなかったのだけれど、気に入っちゃって。ごめんね？」

「可愛いから全然全く微塵も問題ありませんけどね！」

「あはは、ありがとう。……で、話を戻してキミを雇った理由というやつなのだけど、残念ながらキミが期待するような深い理由は無くてね、僕が丹精込めて書き上げたチラシが怪し過ぎるせいか燠くんが電話してきてくれるまで二週間も全然応募が無かったものだから、もう誰か電話してきてくれる子がいたらとりあえず採用にしておこうって心に決めてたんだよね」

「……えーとつまり要約すると 誰でも良かった？」

「うんっ！」

「わあ笑顔が眩しいや！」

まあ、これはある意味誰かが応募する前に応募できてラッキーとポジティブに捉えるべきでしょうか……。

というかそこまで人手不足に悩んでいたのならそもそもチラシを作り直せばよかったのでは？という疑問も浮かぶには浮かんでいましたが、とにかくこれで俺の月収が百万円になるということが確定したのですからわざわざ言う必要ありませんね。素直に事態を受け入れることにしましょう。

ふふふ……これで俺も学生にして年収一千万オーバーのリア充（現実生活が充実してる人）の仲間入りですよ！

嗚呼、両親のありがたみを忘れたわけではありませんけれど両親が健在だった頃より収入が大きくなる日があるなんて驚きです！

これで俺と妹の学費はもちろんのこと、少々高めの車なんかも買えちゃうかもしれませんねえ！

そして高級車をぶいぶい乗り回して可愛い彼女（きつとできる筈です、いつか）とドライブ！ 素晴らしきリア充ライフばんざーい！ ばんざーい！

……あれ、ちょっと待ってください。

先程聞いた通り禍波さんが俺の新しい雇い主様だということは、百万円という莫大な報酬は禍波さんが支払ってくれるというわけですよ？

だとすれば、これは果たして素直に喜んでも良いのでしょうか…

…。

禍波さんは雰囲気こそ子供のそれとはかけ離れているものの、見た目はどう見ても子供。とてもじゃありませんが百万円という大金を軽々と俺に渡すことのできるような人には見えません。今までの会話から鑑みるに冗談が好きな人のようでもありませんから、もしかしたら百万円という報酬も冗談でした、という展開だってあり得なくはないかもしれません。

これは……一応確認しておくべきでしょう。

「あの、禍波さん禍波さん。俺を雇用していただけるのは光栄の至りなのですが、あのチラシに書いてあった月給百万円というのは本当なのですか？」

「うん？ ああ、給料のことかい？ もちろん本当だよ。毎月百万円を支払うことは約束しよう。働き次第ではそれ以上支払っても良いくらいだしね」

「ま、マジで本気で本気でリアリーですか！？ 本当のホントでマジデジマで百万円頂けるんですか！？」

「あはは、信用できないかい？ なんだったら前払いでもいいよ。うーんと……ちょっと待ってね」

禍波さんはそんなことを言ったかと思うと突然ベンチから立ち上がり、着ているドレスの胸元へと腕を突っ込み、ごそごそと漁り出し始めました。

そんなことをしていれば当然、禍波さんの腕によってドレスの襟

元が広げられていますからちらちらと禍波さんの白い柔肌が見え隠れ見え隠れ。あつ、今ちよつと膨らみつばいのが見え　なんて非紳士的な視線を俺が向けているはずもなく、しっかりと手で覆って禍波さんを直視しないようにしています。指の隙間からなんて何も見えてません。……見えてませんから邪魔しないで下さい。

そんなこんなで格闘すること数十秒、禍波さんはやつとごそごそと服の中を漁る動きを止め、胸元から何か紙の束のようなものを引っっこ抜きました。

そしてその引っっこ抜いた何かを座ったままの俺に向かって放り投げてきます。

突然のことでしたが俺はそれをうまくキャッチし、何をよこされたのでしょうかと公園の照明にあてて確認してみると、その紙の束には福沢諭吉様が描かれていました。

有り体に言うなら一万円というやつです。普通に言っても一万円というやつです。

それがたくさん、紙幣とは思えないような重量の束となって、俺の手に握られています。

……あ、ほんのり温かい。禍波さんのお胸の温度だあ、わあい

「　　つて喜ぶところ違いますよ俺っ!？　ちちちちよちよちよちと禍波さん、いったいこれは何ですか!？　あなたいったい俺に何を寄越してくれやがりましたか!？」

「匂いを嗅いでみればわかるんじゃないかな」

「くんくんくん……むむつ、こ、これはすごく良い香りがあります!　禍波さん……はあはあ禍波さん良い匂い……はあはあ……」

「……燠くんごめん、やっぱやめてちょっと気持ち悪いや」

「な、何ですって！？ こ、こんなに良い匂いなのにやめると申されますか！？」

「燠くんのスペックを見誤っていたようだよ、うん。だからちょっとそれ鼻から離して僕の説明聞いてくれないかな？」

「あ、ハイすみません……」

言いながらベンチに腰を戻す禍波さんでしたが、気のせいかなその位置は先程より俺から離れているような気がします。

何故でしょうか……。

「んつとね、それは前払い分の百万円だよ。これで僕が百万円という給与を支払う能力があると信用してもらえたかな？」

「あ、百万円ですか。そうですか、百万円　つてええええええええ！？　百万円つて、え、諭吉さんが百人分ですか！？」

「うん、百万円。やっと普通の反応に戻ってくれたね」

「禍波さんの香りで遠い世界へとトリップしていて頭から抜け落ちていましたけど、やっぱりこれ百万円だったんですか！？　こんなに良い匂いがするのに百万円だったんですね！」

「燠くん、いい加減そこから離れてね？」

「しかも現金！？ え、あの、俺本当にこんな大金もらっちゃつていいんですか！？ 百万円ですよ百万円！？」

「いいんだよ、給料の前払いだからさ。燠くんには当然のよう
うに受け取り権利がある。気兼ねなくポケットに収めておくれよ」

「あ、あ、ありがとございます……！ こんな良い匂いの大金
を毎月もらえるだなんて、俺は夢でも見ているのでしょうか！？」

「……じ、次回からは普通に渡そうかな……」

禍波さんが若干引き気味なのが気になりますが……何はともあれ、
禍波さんが百万円という大金をぽんと出せる人物であり、給料もき
ちんと支払ってくれそうだとすることはよくわかりました。

……ですが、禍波さんはわかっているのでしょうか。

こうして前払いをしたことにより、俺がこのまま百万円を持ち逃
げして仕事をしない可能性が発生するということ。

いや、もちろん半分が誠実さで構成されているこの俺にそんな行
動を起こす気など毛頭ありませんが、しかし百万円という見たこと
も触ったこともない大量の現金を手にして多少なりとも動揺、興奮、
高揚しております。このまま逃げ去りたいという人がいたら、気持
ちはわからなくはありません。

ただ単に禍波さんが俺のことを信用して渡してくれたのかもしれ
ませんが、いささか無用心過ぎるのではないでしょうか などと
考えていると、それを見透かしたような禍波さんの発言が。

「僕はね、これでも人を見る目はある方だと思っているんだ」

「人を見る目……ですか？」

「うん。名前くらいしか知らない会ったばかりの相手でもさ、わかることってあるだろう？ この人はきつとこういう性格なんだろうなあ、こういう考えを持っているんだろうなあ、といったような予想めいたことがさ。第一印象とはまた違ったものなのだけど、まあ近いものだから同じと考えても良いかもしれないね。それはしばしば想像に過ぎないものだったりして現実との食い違いが生じることもあるけど、僕のその想像は大体外れないんだ。その想像で僕は燗くんを信用に足る人物だと判断した。だからその判断に従って給料を前払いさせてもらっただけのことさ。持ち逃げされる、だなんて可能性は初めから考慮の内に入ってないんだよ」

「……なるほど。つまり簡単に言ってしまうえば、その第一印象とやらで俺は禍波さんのお眼鏡に適った　　そういうわけですね？」

「そうだね、そういうこと。だから燗くん、僕はキミを信用した上で言わせてもらいたいのだけれど　　」

そして禍波さんは再び立ち上がり、俺の目の前に立って華奢な右手を差し出し、眩しいほどにこやかな笑顔でこう言うのでした。

「　　僕の下で働いてくれないかい？」

その笑顔に一切の迷いは見当たりません。
器が大きいのか。
人を疑うことを知らないだけなのかはわかりませんが

「ふーむ、ふむ。ハイ、わかりました！　そこまで仰られて断れるはずありませんし断る理由もありません！　この話、ありがたく受けさせていただきますっ！　報酬に見合う働きをバリバリガリガリ頑張りますのでこれからよろしくお願いしますっ！」

禍波さんが俺を信用してくれたように、俺も禍波さんを信用して、雇われることにしたいと思います。

恐らく、悪いことにはならないでしょう。

そんな予感がします。

そんな気にさせてくれます。

……不思議な人ですねえ、ホント。

ですが、いくら不思議少女禍波さんだとはいえ、まさか次のような行動に移ると思っていなかった俺は、完全に面食らう形となりました。

「よし、じゃあ燠くんは採用ということですね。これからよろしくね。早速だけど、時間もなしし契約させてもらっね」

失礼ながら身長が合わなかったため、俺は差し出された禍波さん

「うん？ なんだい？ 日本語で頼むよ」

「だ、だだだから、ななナニな何をしてくれちゃってんですかと言っただけですよー！！」

『面食らった』というよりはむしろ『面食らわれた』と表現したほうが正しいのかもしれませんが、そんなことはどうでもよく、俺の頭は一瞬にして真っ白になり、百万円を渡されたときとは比較にならないほどの動揺と混乱に襲われた俺は、ただただそう叫ぶことしかできませんでした。

しかし事の張本人である禍波さんといえば涼しい表情で、「そんなに動揺しちゃって、いったいどうしたんだい？」とでも言いたげな表情で首を傾げています。

「何をって……キスだよ、キス。もしかして知らなかったのかい？」

「しし知らないわけないでしょお！？ こ、このご時世で古今東西どこを探せばキスという行為を知らない人間がいるんですか！だ、だだだから俺が言いたいのはですね、何でキキキ、キッスをしたんですかと聞いているんです！」

「する前に言っただろう？ 契約だよ、契約。雇用契約を結ぶためのキスだよ。……何か変だったかい？」

「へ、変も何も、普通はそういう契約でキスなんてしませんから！ 聞いたことありませんよ！？」

「ふうん、そうなのかい？ 人を雇用するにあたって人間関係に関する様々な参考書を読んでいたのだけれど、確かに『突然のkissで彼はあなたにメロメロ！ 停滞した関係を切り開きたいときにはイチかバチか賭けてみよう！』と書いてあったんだけどなあ」

「何の参考書ですかそれ！？ 絶対上司と部下の関係に関する情報じゃありません！」

俺は頭をがりがりと走って公園の冷たい石床の上を転げ回りました。

脳の処理速度がまったく追いついてくれません。熱暴走で溶けてしまいそうです。

なんてことをやっているよ、

「……なんかごめんね。まさかこんなに嫌がられるとは思わなくて。もう二度としないから許してくれないかな」

どうやら俺の挙動不審っぷりが過ぎたようで、禍波さんが申し訳無さそうな表情で謝罪をしてきてしまう始末。

「こ、これはいけません……禍波さんは何も悪くないというのに！ ですが突然のキスというものの威力の絶大さを知ってしまった今、このまま放置しておくというわけにもいきません……。ここは正直な考えを述べさせていただくべきでしょう。」

「い、いえこれは決して嫌がっているわけではなくてただ単に戸惑っているというかむしろ両手をあげてヒヤッホイと喜びたいくらい

いなので謝っていただく必要は全く無いのですが、やはりこういうことは恋人同士などで行うべきだと思つので、ええ、まあやめていただいたほうが無難でしょうかね……」

「しかし僕の唇の柔らかさを忘れられずに今晚ベッドの上で悶々とする燠くんであつた」

「変なモノローグ挟むのやめていただけませんか!？」

「ポケットティッシュあるけど、いる?」

「何の心配してくださつてるんですか、何の!?!」

「まあ僕も僕とてキスするの初めてだったからね、燠くんの心配をしている場合じゃないかもしれないなあ。あはは、結構ドキドキするものなんだね?」

「……ハイ? ハジメテ? キススルノ? ファースト?」

「うん。キスするのは燠くんが初めてだったよ?」

「ふあーすときつすうううう!?!」

何、何なんですかこの展開!?

どうして俺こんな見た目幼い少女のファーストキス奪っちゃったことになつてるんですか!?!

女の子のファーストキスとか重っ! 罪悪感物凄っ!

俺死ぬんですかね?

こんなイベント起こしちゃって、これから死ぬんですかねやつぱり！？

それとも伏線何かなんですかねえ！？ 「禍波ちゃんのファーストキス奪いやがって……死ねええええ！」みたいな展開のフラグだったんですかねえ！？

もうとにかくイヤアアアアアア！！

そうして俺が再び頭を抱えて悶えていると、つい先程ファーストキスを済ましたばかりの初々しき乙女（……のはず）である禍波さんが突然「あ！」と声を上げてベンチから立ち上がりました。

いったいどうしたというのでしょうか。

「ごめん燠くん、僕これから行かなくちゃならないところがあるんだったよ。とりあえず契約も済んだし、今日のところはここまでってことでいいかな？ 後でまた電話するからさ」

「……へ？ あ、ハイ。よ、用事があるのでしたらそちらを優先していただいてくれて構いませんよ、ええ。」

このまま話していても、今日の俺はキスの衝撃から抜けられそうにありませんし……丁度良いです。

引き止める必要はありません。

「うん、ありがとう。じゃあまたね、燠くん。仕事ができたら連絡するから、これからよろしく頼むよ」

そう言っつて外見相応のかわいらしい笑みを見せ、小さな手をひらひらと振ってから俺に背を向けて去っていく禍波さん。

未だに頭の中が沸騰していて冷静な判断ができなかった俺はしばらくその後ろ姿をぼーっと眺めていましたが、大変なことを聞き忘れていたことに気が付き、慌てて立ち上がって禍波さんを追いかけて走ります。

どうして俺はこれを聞かずに契約してしまったのでしょうか……。
いや、決して後悔しているわけではありませんが、それでも雇用の契約を結ぶ上で最も重要な点を聞き忘れるだなんて間抜けすぎます……！

しかし、結果から言っつてしまえば俺がそれを禍波さんに訊くことは適いませんでした。

公園から出て行くところまでは目で追えていたはずだったので、俺が公園から出るともうそこに禍波さんの姿はありませんでした。

禍波さんが公園から出てから俺が公園から出るまでの間はわずかな数秒程度。たったそれだけの間に距離を離されたとは考えられませんが、まるで夜の闇に溶け込んで消えてしまったかのように、禍波さんの姿は痕跡すら見当たりませんでした。

行き場を失った言葉が、俺の独白となって夜の住宅街に木霊します。

「禍波さん……百万円の仕事の内容って、いったい何なのですか

……？」

鷺澤燠、一八歳独身、大学生。
月収百万円 職種不明。

……俺の新しいステータスです。

禍波さんに出会い、雇用契約を結んだ夜から二日が経過しました。

未だに禍波さんから仕事の連絡はありません。てっきり求人をしているくらいなのだからよっぽど多忙な仕事だと思っていたのですが、そうでもないのでしょうか。

大学の講義もあるので頻繁に呼び出されるよりは良いのかもしれませんが……これはこれで心苦しいですね。

百万円という大金に見合った働きを存分に見せるつもりでしたのに、これでは給料泥棒もいいところです。

そう、百万円。

突然大金を投げてよこされたりキスをされたり姿を消したりと、よくよく思い返せば禍波さんと出会った夜はもしかすると夢だったのではないかと思えるようなことばかりが起きていました。

ですが家に帰ってもちゃんと百万円の札束は俺のポケットの中に収まっていますし、銀行に預け入れる際にも消えたりしませんでした。

あの百万円は紛れもないリアル。

禍波さんとの出会いも間違いなくリアルなのです。

俺は禍波さんの下で働く契約をし、前払い分の給料として百万円をいただきました。

夢でない以上、俺は働かねばならないのです。

働かねばならないのですが 呼び出しが無い以上どうしようも

ないのも確かです。

こちらから電話をかけてみていつも留守番電話になりますし、仕事内容もわかりませんからそれに関する知識や技術を身につけることすらままなりません。

俺にできるのはいつ呼び出しがかかってもすぐに行動できるよう
なすっかりとした心構えを作っておくことくらいなのです。

そう、たとえ仕事の内容がわからなくとも、どんな仕事でもバリ
バリこなせるような心構えを　　！！

……どんな仕事なんでしょうね、本当。

「はあ……」

不安からか、自然とため息も出るというものです。

それ程大きなため息をついたつもりはなかったのですが、耳聴く
それを聞きつけたマスターが声をかけてきました。

「どうしたんだ鷺澤、ため息なんかついて。何か悩み事か？」

この太い眉と無精ヒゲがチャームポイント（自称）のマスターと
呼ばれる人物は、俺が日頃懇意にしている小さな喫茶店『スリーラ
イク』の店長である三好野熱雄みよしのあつおさんです。三四歳独身彼女なし、出
来る気配もなし。

喫茶店のマスターというよりはむしろ柔道や空手などといった武
道の師範マスターにしか見えない大柄で筋肉質な肉体からは考えられないほ
ど繊細で深い味のコーヒーを出してくれることで定評があり、固定

客の多くがマスターのコーヒーのファンなのです。俺もその味に魅了されて常連になった人間の一人だったりします。

人は見かけによらないとは言いますけれど、あの言葉は本当だったのだなあと実感させられる人なのです。

『スリーライク』は立地条件もまずまずで、ここ七見河町の中心街である葵原あおいはら、その駅前の大通りに面した一等地に看板を出しています。

七見河町は田舎ではありますが、田舎なりに葵原は発展している地区であり、様々な娯楽施設や流行のショップなどが集中しているので休日になると地元民が集まりたくさんの人々でごった返します。特にこの駅前の大通りは平日でも通勤・通学する人々が絶え間なく行き交うため、『スリーライク』もそれに乗じてなかなかの繁盛ぶりを見せているようです。

今も午後のコーヒータ임을満喫しているお客さんが俺の他にも数人。

一見するとメイドさんのようにしか見えない可愛らしい制服を身につけたウエイトレスさんが忙しそうにテーブル席からテーブル席へと動き回っております。

ともあれ、そんなお店のマスターとそれなりに長い付き合いである俺は、こうして店に訪れる度にお声をかけていただいている次第であります。

いつもならここで長年の友人と話すときのような自然体で話を展開させていくのですが……しかし今回はやはりどうでしょう。

百万円という大金が絡んだアルバイトの話なんて気安くして良いものではないはず。こんな不況の時代の下では少なくとも気分を良くする話でないのは確かですし……。

……仕方ありません。

嘘をつくのは少々心苦しいですが、誤魔化させていただきます。

「いえ……この店のウェイトレスさんは相変わらず可愛い子ばかりですねえと思つてちよつとマスターが羨ましくなつてしまつていただけですよ。どうしたらこんなハーレムが出来上がるんですか？」

「フツ……俺の男気に引き寄せられて可愛い女の子ばかりが面接に来るものでな、自然と出来上がつてしまつただけだ」

「へー……………？」

「おい、どうして疑問系になるんだ」

俺がこう言つてしまうのもアレですが……マスターはダンディではありませんが、イケメンではないかと……。

マスターの顔見てると何かを思い出すんですよえ……。

何でしたっけ、何でしたっけ、えーと あ、ゴリラだあ！

以上、俺の返事が疑問符になるのも無理ありませんという話でした。

「仕方ない、納得できなかったのならばこう言い直そう。フツ……俺の男根に引き寄せられていやらしい雌豚どもが陰臭を撒き散らしながら」

「マスター、言い直した意味がわかりませんしそもそもここ飲食店ですよー。他のお客さんいますよー。男根とか言っちゃダメですよー」

「何を言っている鷺澤。料理もコーヒーも男根も結局は口に入れるものなのだから誰も気にするはずがないだろう？」

「な、なるほど！ 口に入れることができるのだから汚いはずがない、だから例え食材の中に紛れ込んでいたとしても気にならない……っ！？」

「そうだぞ鷺澤、男根という言葉をまるで汚物のように扱つのは間違っているのだ。大体お前は男だろう？ 男根の否定はお前という存在の否定に等しい。『我男根、故に我在り』という言葉を唱えた歴史上の偉人だっているくらいなんだぞ」

「自己存在男根説！？」

「だから男なら男根を称え、敬い、崇めるのは当然のことなんだ。それがわかったのならお前も大きな声で叫べ。恥ずかしがらずに自身を持って胸を張り、男根万歳と　っへぶしゆるあー！？」

しかしマスターの叫びが店内に響き渡ることはありませんでした。突如猛スピードで飛来した銀色のトレーがマスターの側頭部を打ち抜き、熊のように大きな巨体がぐらりと傾げて床に倒れ伏します。驚いた俺が銀トレーが飛んできた方向に目を向けると、端正な顔立ちをした黒髪のウェイトレスさんが肩を怒らせながらこちらに向かってツカツカと歩いてきている姿が映し出されます。

そのウェイトレスさんは一切の迷い無くカウンターの中へと入っ

ていき、飛び道具によつてすっかりと意識が刈られたマスターの横
辺りで立ち止まったかと思うと、見るからに容赦という言葉が存在
する余地も無さそうな力加減でマスターの身体を思いっきり踏みつ
けました。

「男根男根うつせえんだよボケ！ んなに男根が好きなら部屋に
閉じこもつててめえのその汚えモノでも握つてやがれ！ ていうか
おいコラ黙つてねえで言い訳の一つでも言つてみる！ 男根つてし
か言えねえのかその口は！ あア！？」

そう怒鳴っている間にもそのウェイトレスさんは意識の飛んだマ
スターを踏みつけることは止めず、見た目細い足から繰り出される
強烈な踏みつけにマスターの身体はもう痙攣することしか反応を
見せられなくなっています。

白目をむいた表情が心なしかちよつと嬉しそうに見えるのは気の
せいでしょうか。気のせいですね。

……とりあえずそろそろ止めてあげないとマスターの命が危ない
でしょう。

マスターの口から魂がはみ出してきているのが見える気がしますし。

幸い、このバイオレンスなウェイトレスさんとは顔見知り と
いうか中学、高校、大学と同じ学校に通う長い付き合いの友人だつ
たりするので声をかけるのに問題はありません。

名前は八刀九弓^{やしくゆみ}さん。

巻き込まれないようにだけ注意しましょう。

「あのー九弓さん、恐縮ながら進言させていただきますと、マスター意識どころか魂まで飛んで行っちゃいそうなのでその辺で勘弁してあげてください」

「あア！？ 知るかポケ！ つーか燠、てめえも共犯だろうが！ 熱雄が変態なのくらいわかってんだろ！？ 変なこと語りだしたらノせてねえですぐ止めるよ！ 他のお客さんに迷惑かけやがって！」

「いやーまあそれは確かにその通りなのですけれど……九弓さんももう少しトーンダウンしたほうがよろしくないですか？ ほら、お客さんみんな九弓さんのこと見てますよ」

俺が言うと、九弓さんは「え？」と声を上げてやっとな周囲の視線が自分に集中していることに気付いたようです。

するとすぐにお客さん達に向かい深々と頭を下げて「すみません、お騒がせいたしました！」と謝罪の言葉を述べましたが時既に遅し。お客さんたちは皆微妙な笑顔を浮かべて目を逸らすのでした。

……こんなに外見が整った見るからに大人しそうな乙女が急に声を荒げて男根と連呼しながらマスターをぐっちやぐちやに踏み殺そうとしていれば、目を向けてしまうのも致し方ないというか。

先程まで笑顔で接客してくれていたはずの可愛いウェイトレスさんがここまで豹変したらそりゃ驚きますよね。

そんなわけで良い感じに赤っ恥をかいたマイフレンド九弓さん。

当然その怒りはすぐ目の前にいる俺へと降りかかってくるわけで、九弓さんは他のお客さんに聞こえないような小さな声で俺へとクレームを申し立ててきます。

「……まったく、最悪だ……。てめえのせいだぞ、燗。毎度毎度熱雄とバカばかりやらかしゃがって……。注意する方の身にもなれっ
てんだ」

「ご一緒にどうですか？ 意外と楽しいものですよ」

「どうもクソもあるかバカ。お前らに油売ってる暇なんてねえっつーの。暇があってもお前らみたいな変態と同類にはなりたくねえ」

「心外ですねえ、俺は割とノーマルですよ。というかむしろ九弓さんのほうが立派な変態さんじゃないですか。もっと自分に素直になりましょうよー」

「はア？ 俺のどこが変態だって言うんだよ。お前らなんかと違って俺は全然普通」

「へえ。男の子がそんな可愛らしいウェイトレスさんの格好してるのは普通なんですか？」

「ちょ、てめっ……。！？ バカおい何言いやがってんだクソが！
？」

慌てて俺の髪をむんずと鷲掴み、そのままカウンター越しに引張って首をがっちりと押さえ込む九弓さん。

誰かに聞かれたんじゃないかと心配で周囲をキョロキョロと落ちて着き無く見渡す九弓さんの慌てふためく姿は大変可愛らしく、顔を赤らめて口の辺りを手でちょこんと押さええる仕草を見ても女の子だ

としか思えませんが

一人称は俺。

言葉遣いは荒め。

頭に血が上りやすく、手が出るのが早い。

しかし小柄で華奢な体格、見る者の心を奪うような可愛いご尊顔、そして服の上からでもはつきりとわかるほどに膨らんだ胸元。

ただし、性別は”男”。

……なんともややこしい。

まあ、簡単に言ってしまうえば今巷で流行の”男の娘”というやつですね、ハイ。

中身は今までの会話の通り、完全に男の子ですけどね。

とはいえ、この事実を知る人間はそう多くありません。

九弓さんは男の娘にあるまじきお胸があり、加えて声まで可愛らしいですから、外見などから男だと判断することはまず不可能。学校側にも圧力をかけて特別に女子扱いされるようになっていしますし、九弓さん自身も普段は女の子のように振舞っているのです、疑う者すら存在しないと行って良いでしょう。

ならば何故俺がそんな九弓さんの知っているのかと言えば、そこには色々な事情があるのですが……ここでは一旦保留とさせていただきますしよう。

マスターの次は俺の命が危ないです。

「痛い！ 痛いです九弓さん髪は引つ張らないでハゲちゃう！ 大丈夫ですよ、他のお客さんには聞こえないような声量で言いましたから聞こえてないはずですよ！ だから離してー！ イヤーー！」

「うるせえ！ てめえバレたらどうしてくれんだよコラ……！俺だって好きでこんな格好してるんじゃないよ！ 燦だってそれくらいわかってんだろ！？」

九弓さんが女装している理由は、奇異の目で見られることやイジメを回避するためだと聞いています。

九弓さんのように可愛いお方が男の格好で男らしく振舞っていたら皆戸惑うこと間違いなし……特に膨らんだ胸元が一番マズイです。遺伝子の異常により女性的な体になってしまったようですが、そんな事情を理解してくれる人が多いとは限りません。まず間違いなく普通の男子生徒として生活していくのは困難だったでしょう。

……そう。

女性的な体つきである九弓さん。

その見た目通り、密着すると女の子特有の甘い香りが鼻をつき、ヘッドロックなんてされた日にはもう

「そんなことより九弓さん……お胸が顔にあたっただけでも幸せです。このまま一生締め上げてください」

「っ！？ バカ燦っ！ この変態！ 熱雄かお前は！？」

俺が言うと、顔を真っ赤にしながらロックを外してカウンターへと俺の頭を叩きつける九弓さん。

そしてすぐに胸を隠すように自分の体を抱いて、羞恥に染まった怒りの表情で俺を睨みつけてきます。

……ですがその表情の可愛さといったら、もう言葉に出来ません。正直悶えて死にそうです。

九弓さんが男の娘だって知らなければ……辛い現実なんて知らなければ俺は素直に恋していたでしょうに……！

こんなやり取りもラブコメ的な日常風景として受け入れられていたでしょうに……！

もし神がいるのなら、どうしてこんな理不尽を世界に与えたのかと小一時間問い詰めさせていただきたいですね！　というか一発殴らせていただきたいですね！

嗚呼、それにしてもカウンターは硬くて痛いです……お胸の柔らかい感触が懐かしい……。

「いたたた……それはそうと九弓さん、またサイズアップしてません？」

「なっ……！？　う、うるせえバカ黙れ黙れー！　とつとと死ね、百回死んで二度とうちの店に来るんじゃねえー！」

「おやおや、俺だって一応お客さんですよ。まだ注文だって何もしてませんし、このまま帰ると冷やかしてみたいになっちゃうじゃないですかー」

「知るかバカ！　じゃあさっさと注文しろ！　注文だけしたらあとは金払って帰れ！」

「それじゃ注文する意味ないじゃないですか……。まあいいです、ではコーヒー一つお願いできますか？」

「熱雄の意識が戻るまでコーヒ―は無理だバカ野郎外の自販機で缶コーヒ―でも飲んでろクソつたれ」

「…………注文取る気ありませんよね？」

「うん。早くお帰りくださいお客様」

あらまあ素直な子っ。

目一杯の接客スマイルが可愛らしいのに物凄く嫌味くさいっ。

そんなとき、九弓さんの足元からマスターの低い呻き声が聞こえてきました。

どうやら息を吹き返したようです。

カウンターから中の様子を覗き見てみると、いかにも満身創痍といったボロボロの姿で床に横たわるマスターの巨体がありました。

「鷺澤……………」
「コーヒ―なら、出せるぞ……………ぐっ……………うっっ……………！」

「ま、マスター！ その傷では無理です！ まだ休んでいてください、ここは俺が何とかしますから！」

「そんなわけにはいかない……………。俺は……………俺はこの戦いが終わったら国に帰って……………ぐふっ……………借りっぱなしだったエロDVDを観るんだから……………な……………。だから、大丈夫だ……………」

「マスター……………！ そうですね、帰りましょう！ マスターのエロDVDもきつとあなたの帰りを待っていますよ！」

「……てめえらバカだろ。何だその意味の分からん寸劇は……」

九弓さんの呆れた声が聞こえてきましたが、俺は構わずカウンタ
ーから更に身を乗り出してマスターへと向かって手を伸ばします。

「さあマスター、立てますか？ 立てなかったらこの俺の手に掴
まってください！」

「……何を言っているんだ鷺澤……げほっ……俺ならもう既
にきちんと立っているじゃないか……」

「ま、まさかマスター、既に幻覚が見えて……！？ ダメですマ
スター、戻ってきてください！ 現実のあなたは床に寝転んだまま
ですよ！」

「いいや、俺は確かに立っているぞ……！ 目の前にパラダイス
が……天国が広がっているのだから、立たずにいられるわけがある
か……！」

「天国……？」

そこで俺はマスターの視線の先を追ってみることにしました。

マスターの視線は床に倒れ伏すマスターの目から彼のすぐ近くに
立っている人物 つまり九弓さんへと向かって真っ直ぐに伸びて
おり、更に詳しくその視線を辿ってみれば、それは九弓さんが着用
するウェイトレスの制服の短いフリルスカートの中へと侵入してい

ました。

……ああ、なるほど、そういうわけですか。

九弓さんもどうやら俺の視線の動きを見てマスターの言っている意味に気付いたらしく、顔を真っ赤にしてわなわなと震え出しました。

それに気付かないマスターは相変わらず一点だけを見つめ続け、口の端からわずかにヨダレを垂らしながら自分へのトドメとなるとも知らずに言葉を紡ぎ続けます。

「今日は黒か九弓……。ちゃんと女物の下着を着けていることは関心するが、少々エロすぎやしないかそれ。おかげで立ち上がる力も残っていないはずの俺がこんな立派に立ってしまって」

「……………じゃあ一生立ち上がれなくしてやんよこの変態があああああああああ！」

立ち上がっていたマスターの体（の一部）は九弓さんの足によって打ち砕かれ、その後俺が店を出るまでマスターの魂が現世に戻ってくることはありませんでした。

あまりにも凄惨な光景だったため、これ以上の描写はできません。マスターが再び立ち上がるのできる日が来るのを密かに祈ってあげましょう。

……なむなむ。

そんなことがあった日の夜、夕食時の午後七時過ぎ。

禍波さんから、初仕事の旨を告げる電話が鳴り響きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4586i/>

陽だまりのように、暖かな

2010年12月25日19時01分発行